文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究 報告書

民間団体と連携した放課後対策モデル事業

池田町教育委員会・中札内村教育委員会
NPO「教育支援協会北海道」
北海道教育委員会

平成22年3月

目　次　CONTENTS

1 調査研究事業の概要 …… 1

2 学習プログラム・学びのノートの開発について …… 3
（1）学習プログラム
（2）学びのノート

3 学習プログラムの提供方法について …… 8
（1）国語の読解に向けて
（2）理科の実験について

4 地域における指導者の発掘及び育成について …… 11
（1）見守りボランティア
（2）講師ボランティア
（3）本事業の検証結果
①指導者の発掘
②指導者の育成について

5 子どもたちの変容 …… 13

6 保護者・家庭の変容 …… 16

7 本事業の成果と課題 …… 18
（1）運営について
（2）指導者・プログラム
（3）地域との関係

参考事例 …… 20

1 調査研究事業の概要

1 事業の区分

民間団体と連携した放課後対策モデル事業

2 事業のテーマ

確かな学力の向上を中心とした放課後対策モデル事業

3 事業の目的

子どもたちが学ぶ楽しさを実感し、主体的に学び続ける意欲や態度を身に付け、変化の激しい社会を自立して生きていくことができるよう、市町村や民間団体と連携し、確かな学力の向上を図るための放課後対策モデル事業を実施し、その成果の普及を図る。

4 背景・必要性

背景

（1）放課後子どもプランにおける「放課後子ども教室」の実施により、安全・安心な子どもの活動拠点が整備されている市町村の割合が低い。
（H21年度、44市町村・75教室　政令都市、中核市を除く）

（2）全国学力・学習状況調査などの結果から、本道の子どもたちには基礎的・基本的な知識・技能や家庭における学習習慣が十分には身に付いていないなどの課題が明らかになっている。

必要性

放課後や週末等における子どもたちの学習機会を確保するとともに、学びへの意欲を高める学習プログラムの提供や、学習習慣の定着を図るなど、子どもの発達の段階に応じた学習活動の充実を図ることが緊要な課題であることから、本モデル事業を着手する。

5 事業の実施内容・方法

実施内容

基礎・基本の確実な定着や学ぶ意欲をはぐくむ学習プログラムを放課後や週末等に行う。

○週1回程度の教室の開設

○NPOとの連携に基づく学習プログラムの開発

・発達の段階に応じた漢字の読み書きや計算ドリル、外国語活動

・科学への興味・関心を高めさせる理科の実験・観察

○学習プログラムを一層定着させる学びノートの開発

方法

○2市町村へ民間団体から講師を派遣し学習支援を行う（週1回程度）

○民間団体による教材開発及び提供

○地域における指導者（講師）の発掘及び育成（研修会の実施）

組織図

実行委員会

［メンバー構成］

・北海道教育委員会地域支援室（6）

・モデル市町村教育委員会（2）
（池田町・中札内村）

・NPO教育支援協会北海道（2）

ワーキンググループ（市町村）

［メンバー構成］

・モデル市町村関係者

・NPO教育支援協会北海道

2 学習プログラム・学びのノートの開発について

（1）学習プログラム

今回の放課後まなびぃの実施に向け、まず考えたことは児童と講師・地域との関係性、それぞれの役割です。「リンカーンメソッド」と名付けたこの形（下図）は、子どもの集まりが核となり、子ども一人一人が発達段階に応じて、「ルールを守る」「リーダーとなる」などの役割を見いだすとともに、大人はこの子どもの集まりの周りに位置し、「見守る・認める」役を担い、子どもが「自分で課題を見つける」「自分で取り組むことを決める」ことができるよう後押しをするというものです。

そして、このリンカーンメソッドを踏まえ、子どもの自発的な活動を引き出すことを目的にコンテンツを選び、プログラム化の方針を決定した。

リンカーンmethod

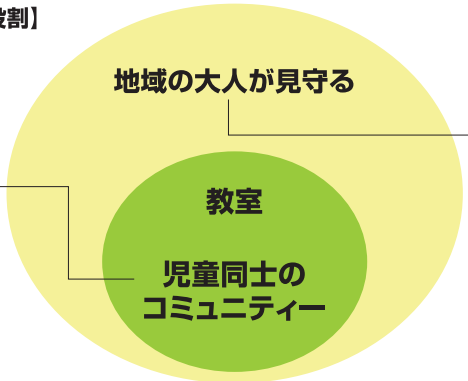
児童の、児童による、児童のための地域子ども教室「放課後まなびぃ」

【コミュニティー内での児童の役割】

（1、2年生）
ルールを守るなど集団の活動に慣れる。

（3、4年生）
自分の意見を言う
下の子の面倒を見る。

（5、6年生）
意見をまとめるなど
集団のリーダーになる。



地域の大人は児童の活動を見守る。
大切なことは、児童やその取り組みを認め、誉め、励ますこと。（承認すること）

活動での目標
〈内発的な活動を支援する〉

・自分で課題を見付ける
・自分で取り組むことを決める

➡ **これらができるようになるようクセをつける**

「放課後まなびぃ」の取組においては、1年生～6年生の児童が一緒に活動することにより、その活動自体が子どものコミュニティーとなります。また、その活動にはそれを見守る地域の大人の存在が必要で、大人たちがその活動や子ども自身を、認め、励まし、誉めることが、子どもたちの活動を後押しすることになります。

子どもは、このように『承認』される経験が多ければ多いほど、自分に自信をもち、心豊かに成長します。また、自分の経験と同じように周りの人を認め、励まし、誉めることができる人間に成長し、それがコミュニケーション能力につながります。

ひと昔前までは、家族、近所単位の中で、兄弟が複数いたり、おじいちゃん・おばあちゃんと同居していたり、近所の子ども同士の関係も深いなど、その中でコミュニティーは存在していました。

しかし、それが難しい現在だからこそ、放課後活動において、このコミュニティー形成をしていきます。

活動の中では与えられたものに取り組んだり、言われたことを行ったりするのではなく、子ども自身が課題を見付けたり、取り組むことを決めたりするなど、自分で進む力を身に付けることを目標とします。

「指示待ち」の姿勢では学ぶとは言いません。自分で「次はどうしよう」「これをやってみよう」と決められるようになることを目指します。そのことが、「自分に責任をもつ」ことにもつながります。学力向上は、子ども自身の「やる気」が鍵となります。

コンテンツと特徴

漢字はかせ（小学校の1008字の音読み・訓読みのトレーニング）

・読みだけを行い、すべての学年が1年生の漢字から始める。
・出てきた漢字の音読み・訓読みを一緒に覚える。

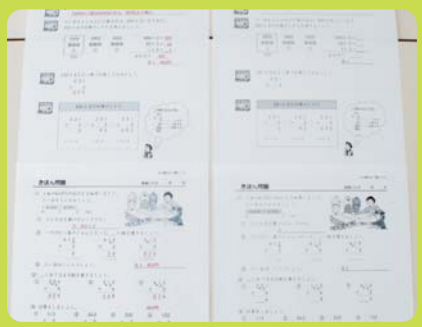
※学校では一つの漢字の音読みは2年生、訓読みは3年生など、学年をまたいで音読み、訓読みを学習するが、これを最初に出てきた学年で一緒に覚える。読みだけを行うことで、学年に関係なく習熟の程度に応じた取組を行うことができる。

四字熟語

算数は習熟の程度に応じて選べる スモールステップ式の教材

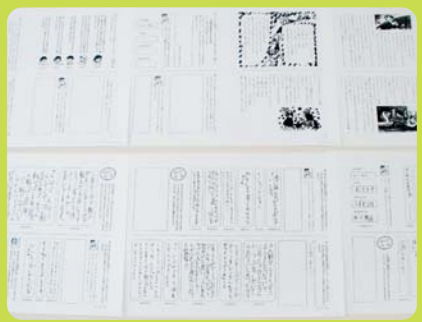
小学校6年間で学習する単元ごとに分けられており、学年をまたいだ単元のつながりが明確になっている。

※例えば、4年生の「垂直と並行」が分からないのであれば、3年生の「三角形と角」に戻って復習するなど、苦手な単元があれば、どの学年のどの単元を復習するとよいかが分かる。



国語は読解で 自分の考え・答えをまとめていく教材

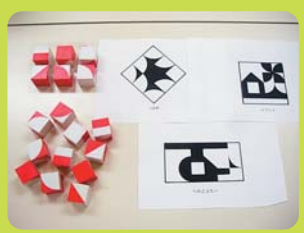
・問題文（物語文）には線や（　）などが入っていないので、まずは本文をよく読むことに集中する。
・設問はすべて記述式なので自分の考え・感じたことを書く。
・答え合わせは解答と照らし合わせるのではなく、仲間と意見を述べ合うことが中心となる。（模範解答は実際の児童の回答を集めて作成したものを使用）



知育プリント・知育パズル・ブロック・かるた等の教具

・プリントは数学的領域のものは点描画や迷路など。
・言語領域では同音異義語、反対語や数詞など、遊びのように取り組むことができる。
・かるたはことわざや四字熟語などテーマごとになっており、読み手と取り手を子ども同士で交代しながら行う。

知育パズル


知育ブロック

英語は季節のイベント（ハロウィーン・クリスマス）など全学年で取り組む内容

・講師はオールイングリッシュで行う。
・読み・書きなどは行わず、聞くこと・話すことを中心にテーマに沿った歌やゲームを楽しむなど、コミュニケーション能力を高めることをねらいとする。

クリスマスツリー

ハロウィーン

理科の実験は身近な材料を使って自分たちで作ってみる・やってみる活動

・空気砲は段ボール、熱気球はビニール袋など身近にある材料をグループごとに協力しながら作っていく。
・細かい説明は省略し、最初に実験を見せまず大人が楽しむ。
・大人のできあがりを見ながらまねて作ったり改良したりする活動を通し、子どもの興味・関心を引き出し、それらを作り出す力へ昇華させる。

〈子ども・保護者に好評だったコンテンツ〉

・数字のマジック、タネの解明・仕掛けづくり

※数字を使ったマジックを見て、まずはタネの解明をしていきます。集中して相談しながら少しずつタネが解明されていきます。タネがわかった後は各自仕掛けを作ります。今回は中札内では大人（教育長や教育委員会の皆さん）相手に披露し、自分たちのマジックで驚く大人の反応を見て、子どもたちは大興奮でした。

空気砲

これらに共通しているのは「学校教育では行わない活動」です。放課後活動である以上は放課後でしかできない内容を放課後ならではの形（リンカーンメソッド）で行うことに意義があると考えています。そして、これらをプログラム化していく上での今回の方針は、

●算数は「一人で」「短時間で」取り組めるので宿題中心とする。
●コンテンツの特徴（1人かグループか、じっくり集中か声を出すかなど）を考え、児童の集中が続くよう組み合わせる。

■コンテンツ分布図 ～活動形態軸による領域区分～

活発に（動的）

漢字はかせ検定

国語読解グループ発表
英語、理科実験

知育パズル・ブロック、クラフト作成、数字マジック
※状況により自由に、一人でやったり、協力したり

ひとりで（個別）

みんなで（集団）

漢字はかせ練習
算数プリント
国語読解回答作成

放課後活動は、この領域には何も属さない。
この領域のみんなで静かにというのは、大人数対象で画一的な従来の学習塾などのスタイル

静かに（静的）

これらをもとに組み立てた実際の60分のプログラムや具体的な提供方法は次項に掲載

（2）学びのノート

本事業において、学習プログラムを一層定着させることを目的に学びのノートの開発を行った。

テーマ：自分の成果を確認する、それを保護者に認めてもらう

「学びたい気持ち」が続くノート

形　式：A4の2穴ファイル、裏表紙に宿題チェックリスト貼付

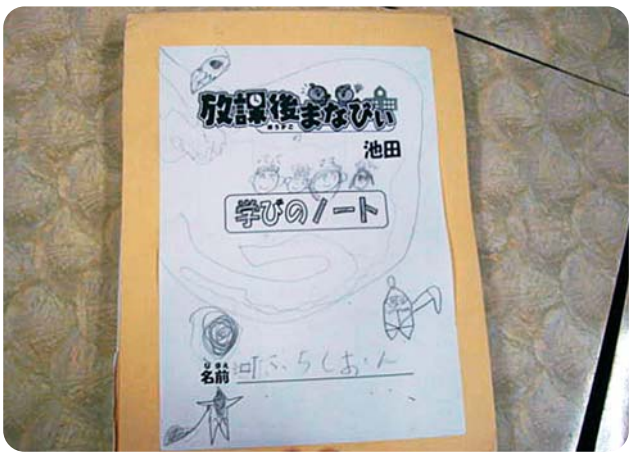
活動の回ごとに「今日やったこと」「次回までにやってくること」「感想」を書き、その日に使ったプリントや宿題と一緒にファイリングしていく。

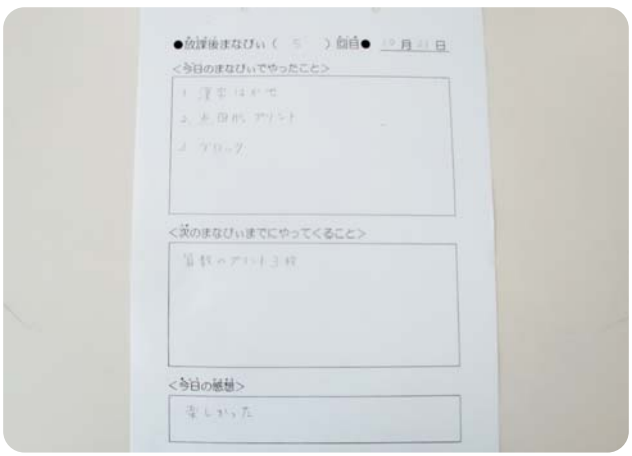
効　果：毎回「振り返り」を行うことで自分の成果を確認する。

家庭で宿題を終えた後、保護者にノートを見せチェック表に記入することにより、保護者が子供の成果や様子を確認できる。また、親子間で活動や学習について話をする機会が増える。

毎回のファイリングはどんどん上に重ねていく形式で行い、時系列で積み重なったものを一番最後の活動で種類分け・ファイリングのし直しを行った。これは、5ヶ月間の活動全体を振り返り、自分の全成果を確認する貴重な機会になった。

形式は見ての通り単純なものだが、「振り返り」を行うことがこのノートの一番の目的である。また、保護者に対しては事前の説明会の中で学びのノート・宿題のチェック、活動の様子を子どもに質問してみるなどのお願いしていたので、家庭での使用がスムーズに行うことができた。このノートを通じて、講師、子供、保護者の一体感も生まれたと感じる。





3 学習プログラムの提供方法について

前項で記載したコンテンツの作成方針に基づき、1回60分でプログラム化を図った2つの柱

（1）国語の読解の取組について

（2）理科実験（冬休み特別版）について

（1）国語の読解に向けて

事業開始後まもなく行った「ワーキング会議」において、池田町・中札内村共に小学生のコミュニケーション能力及び国語の読解力の低さについての課題が挙げられた。そこで、今回の活動の一つ目の柱として「読解の力の向上」をテーマに据えた。

〈プログラムの組み立てで心掛けた2点〉

・最終的に目指す活動のゴール（モデルプログラム）を明確にすること

→初めから「こうあるべき」という強い縛りは作らずに、「今回は読解に取り組める姿勢を作りたい」などゴール地点を想像することに時間をかける。

・ゴールに向かって徐々にプログラムを変えていく

→迷路で遊んでいるつもりがいつの間にか読解をやっていた、という自然な流れをつくる。一見全く違う内容でも要素の一つ「一人で集中」という共通点からつなげるなど、工夫次第で変えていける。

《プログラムの例》※1回60分（　）内は配分時間

中札内村　9/16(水)・1回目

アンケート（15分）	迷路（10分）	点図形（10分）	漢字はかせ説明・練習（25分）

中札内村　9/30(水)・3回目

漢字はかせ練習・検定（20分）	読解（15分）	ことわざかるた（15分）	知育パズル（10分）

中札内村　10/21(水)・5回目

読解とグループで回答の話し合い（25分）	知育プリント（15分）	漢字はかせ・検定（20分）

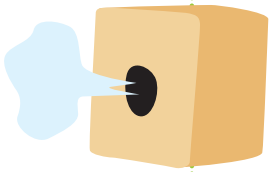
1・2回目は自分の興味のあるものから始めることにより、取り組む・集中する雰囲気を作ることに努めた。3回目から読解の時間を設け、一人で集中する時間を増加した。5回目にはグループ内でリーダーを決めさせ、リーダーを中心に読解におけるお互いの回答を発表し合った。講師は特に指示を出したりせずに、子どもの様子を見守り、消極的なグループに対しての元気付けなどを行った。

（2）理科の実験について

理科の実験で大切なことの一つとして、子ども一人一人から「やってみたい」「どうなっているのだろう」「どうしてだろう、こうしてみよう」「今日は楽しかった」の気持ちを引き出すことです。

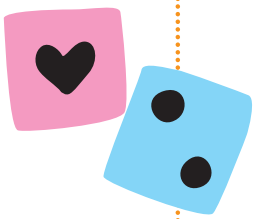
「やってみたい」

実験は言葉で説明してもイメージしづらいので、まずは大人が成功した結果を見せます。今回であれば「空気砲」で、まずは講師が子どもの顔に向かってボン、ボン、ボンと次々に空気砲を発射した。これだけで子どもは皆、「はやく、自分もやってみたい!」と感じます。この最初の導入の5分間で活動のムードは決まります。



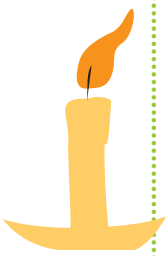
「どうなっているのだろう」

次に、大人が上手にやって見せたことを子どもに真似させます。そこでは細かく教えすぎずに「空気砲」を自由に観察させて、「どうなっているのだろう」と自分達で自由に考えさせ取り組ませます。今回の「空気砲」ではダンボール選び、穴の形・サイズも自由にしたところ、ハートの穴を開けたり、2つの穴を開けたり、ダンボールの面いっぱいの大きい穴を開けるたりするなど、グループごとにオリジナルの空気砲を作っていました。



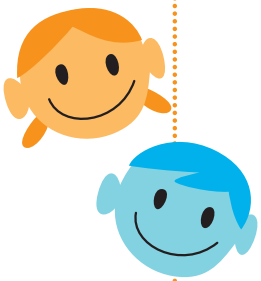
「どうしてだろう、こうしてみよう」

上述のダンボールの面いっぱいの大きい穴のグループは空気砲が上手く発射できませんでした。そこでも大人は教えません。子ども達は自分達の空気砲と上手くいっている空気砲を比べ「どうしてだろう」「こうしてみよう」とまたここでも考えます。驚くことに、このグループは1回目に空気砲を作ったときの倍以上のスピードで、仲間と役割を分担しながら、黙々と2個目の空気砲を作りました。グループで同じ目標に向かって作業する時の集中力は素晴らしいものでした。



「今日は楽しかった」

紆余曲折の中、最後には自分達の力で実験が上手くいき、子ども達は「今日は楽しかった」と表情から分かります。仕上げとして最後に、上手にできたグループにどうして上手くできたか聞いたり、工夫したり、改良をしたグループにはどうしてそのように工夫や改良をしようと思ったかなどを聞いてみます。子ども達は顔を見合わせてあれこれと話をしました。このように活動を振り返り、楽しかったこの気持ちを仲間と共有します。今回の実験ではいつもクールな5年生の女子2人のグループが一番上手に空気砲を飛ばし、3メートル以上離れたろうそくの火を消すことに成功しました。コツを聞いても「別に～」と言っていましたが、そのときの表情はいつになく柔らかでした。



冬休みに 楽しく理科実験

空気砲作って

中札内

【中札内】昨年9月に始まった文科省の委託事業「放課後まなびぃ」の冬休み特別企画「紙芝居&理科実験」が6日、村文化創造センターで開かれた。普段の放課後活動より多い19人の児童が参加し、段ボールを利用した〝空気砲〟作りを楽しんだ。

身近な道具や材料を使い、理科に親しんでもらおうと企画。NPO「教育支援協会北海道」(帯広)の白石友柄さん、内山晶子さん、阿部香織さんが講師を務め、村教委の職員も協力した。

5つのグループに分かれ、それぞれリーダーを決めて相談しながら作業。段ボールをガムテープで密封し、カッターで一カ所に穴を空けて完成させた。児童らは空気砲から勢いよく飛び出す線香の煙に目を白黒。長テーブルを2台並べ、ろうそくの火をどれだけ遠くから消せるかの実験も行った。中札内小の髙嶋里都君(2年)と佐藤大嗣君(同)は「ろうそくの火を消すのが楽しかった」と笑顔。白石さんは「理科にも親しんでもらえた」と話した。

同事業は国の「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業を、村と道教委、同NPOが共同受託している。(菊池宗矩)

空気砲でろうそくを消す実験を楽しむ児童

十勝毎日新聞　2010年1月8日(金)掲載

ふわっと気球 わっと歓声

池田放課後活動 冬休み理科実験

【池田】子供たちの学力向上を目指す放課後活動「放課後まなびぃ」の冬休み特別企画「紙芝居&理科実験」が7日、総合体育館で行われ、児童25人が熱気球作りに挑戦した。

文科省の委託事業で、町と道教委、NPO「教育支援協会北海道」(帯広)が協力して行っている。この日は十勝の開拓をテーマにした紙芝居を上演後、実験に臨んだ。

熱気球はビニール袋と針金で作り、アルコールをしみ込ませた綿に点火すると温まった空気で上昇する仕組み。子供たちは2人一組で製作に取り組み、手に持った気球がふわりと浮かぶと、「浮いた」「やった、やった」と大はしゃぎしていた。

池田小の河渕璃音さん(3年)は「よく揚がった。うれしかった」と笑顔。笠井瞳さん(1年)も「他の人のを見てみたら、真ん中の長さが違っていたので、短くしてみたら揚がった」と工夫の成果を話していた。(小林祐己)

ビニール袋で作った熱気球と子供たち

十勝毎日新聞　2010年1月9日(土)掲載

以上のように、理科実験ではプログラム内容が変わろうと子どもの気持ちを引き出し、自主的に取り組ませる流れで実施します。講師は専門的な知識よりも「楽しくやって見せる」表現力が必要です。また、火を使うプログラムもありますが、「火＝危険」だから「火は使わない」ではなく、安全管理をできる場所で、ボランティア同士が連携して行えば楽しく・安全に実施できますし、「火＝間違って使うと危険」だからルールを守って使おうと学ばせることが大切です。

4 地域における指導者の発掘及び育成について

学習プログラムを中心とした放課後活動のボランティアは大きく「講師ボランティア」「見守りボランティア」の2種類に分けられます。

（1）見守りボランティア

ボランティア全員が「学習プログラムの指導者」である必要はなく、「見守りボランティア」に徹して児童の活動を応援するだけでも十分な役割を果たすことができます。「見守りボランティア」は「やりたい」と思った方が今日から始められるので、保護者や地域の高齢者、さらには高校生でも参加可能です。

（2）講師ボランティア

一方「講師ボランティア」はプログラムの管理・運営などの役割を担うので、「見守りボランティア」の中でも、管理や運営に興味のある方（地元の大学生等）が適任だと思います。この「講師ボランティア」は、今日からすぐに簡単に始められるものではないので、最初は先輩・講師ボランティアから現場でどんどんそのコツを伝授してもらったり、時には勉強会を行いプログラムへの理解を深めていく必要がある。

このように「ボランティアの役割」を分けて考えることにより、

①「見守りボランティア」を広く募ること

②「講師ボランティア」を募り育成すること

という「ボランティア発掘・育成」のための2つの柱を立てた。①は活動の保護者説明会で保護者に呼び掛けるのはもちろんであるが、校区のPTA会、地域の老人会、高校など、地域にある既存の組織に連携を求めるアプローチができる。一方、②は講師ボランティアが集まる既存の組織が少ないのが現状であるので、①の参加者にさらに講師ボランティアとしての参加を案内したり、退職教員・地元大学生・主婦など対象なりうる方たちへの呼びかけたりする必要がある。②は時間・労力が必要であるが、今後、本プログラムが放課後活動等で展開していくのであれば、講師ボランティアの育成は欠かすことができないと考える。

さらに「育成」については、先に述べたとおり「見守りボランティア」はボランティアとしての最低限のルールを確認（常識範囲内）する程度である。「育成」が必要なのは「講師ボランティア」であるが、高い学力・学歴が必要なのではなく、放課後活動等では子供が興味をもつ、やる気になるような魅せる力をもっていることが重要である。大事なのはひとつひとつの教材・教具の使い方、科目の指導力ではなく、活動の意図（「リンカーンメソッド」）を理解し、それにそってプログラムを運営することである。従って、育成のためには

・どんどん現場に立ち、子どもの反応を肌で感じること

・活動の意図をプログラム運営に結び付けるための勉強会・意見交換会を行うこと

これを繰り返し行うことが重要です。講師ボランティアは自分一人だと偏ってしまったり、自分が正しいかどうか迷うこともあります。しかし、現場→勉強会→現場→勉強会……と繰り返し活動することにより、日々の取組の見直し・改善を行うことができるとともに、自分の活動・意見に賛同してくれる仲間がいることで自信をもつことができます。指導者の育成には育成する側がその対象に一方的に理論を与え「育てる」のではなく、活動を通して、指導者同士が相互に「方針・目的・アプローチなどをいかに多く共有できるか」という視点が重要です。

（3）本事業の検証結果

①指導者の発掘

講師ボランティアは教育支援協会北海道の既存の地域教育ボランティア人材バンクに登録している方に声をかけ、希望した2名と教育支援協会北海道専属スタッフ1名が務めた。

講師ボランティアは既存の団体が少ない現状であるので、今後、他の地域で活動を展開する場合は講師ボランティアの発掘が課題となる。

見守りボランティアは今回活動を始めるにあたって、参加児童の募集と同時に、それぞれの町村で「地域ボランティア」を募った。募集の方法は、

・参加児童募集のチラシに「地域ボランティア」の募集も載せ、対象小学校で配布

・各町村の広報に募集の告知

・中札内村においては村主催の老人大学への参加者へも募集の告知

などの方法で行いましたが、結果は応募は1名（元小学校校長）だけであった。参加が少なかったのは、このような活動が地域にとって初めての取組であり、活動の意図や内容がよく理解されていなかったことなどが原因として考えられる。

②指導者の育成について

今回講師として携わった3名（ボランティア・スタッフ）は活動を始める前に、放課後活動・教材についての研修会を実施し、活動開始後は活動の前後に勉強会・報告会などを毎週繰り返し行ってきた。3名のうち毎回活動に携わる2名は、研修会→勉強会→現場→報告会・勉強会→現場……と繰り返し活動していくことで運営の問題点の解決・改善をしたり、意識を共有したりすることができた。

5 子どもたちの変容〈子どものアンケート結果及び実際に現場に立った講師の報告から〉

コンテンツについてのアンケート結果から、1番人気のあったものは理科実験であるが、好きな教科として算数も高いことがわかった。理科実験は子どもの当日の様子からも予想通りの結果といえるが、算数に関しては、予想よりも人気が高かったことに驚いている。次に国語・漢字に関して、当初「読解力を問題視」していると感じていた自治体での活動としては、国語の読解及び漢字もある程度人気が高かったようである。

これらの要因として考えられることは「アプローチ・切り口の多様性」である。算数では①宿題プリント、②点描・図形記憶、パズル、③数字マジックなど、国語では①読解プリント回答・討論、②漢字はかせ練習・検定、③自由作文、④カルタというように普段子どもが「算数」、「国語」とそれぞれの科目と認識しているものに、いくつかのアプローチ・切り口からプログラムを組み入れることで、「楽しい」「もっとやりたい」と感じることができ、教科全般への興味が高まったものと考えられる。

また、「読解力」の調査は今回行っていないが、参考資料として子ども達が書いた自由文を紹介する（P14掲載）。これは活動が終盤に差しかかった冬休み中に、題材、形式すべて自由に取り組んだ作品である。子どもによって様々な個性があり、「緻密さ」、「アイディア」、「ユーモア」や、何よりも自分の考えたことを書こうとする「表現力」を感じさせるものである。文章を読解するとは、ただ文章を読むだけではなく、読んで、自分の考えをまとめ、書き表すという表現力も大切な要素である。これまで多くの自治体では、「読解力」を「読書習慣」と結び付けた取組が行われてきたが、今回は、読書以外のアプローチの仕方を示したものと考える。

「ためになったか」、「また参加したいか」という設問について、多くの子どもが「ためになった」、「また参加したい」と答えるなど、子ども一人一人が本活動で充実した時間を過ごし、「学ぶ」ことを楽しみ、「もっとやりたい」という意欲が高まったと考えられる。講師も、子ども達の活動中の表情が実に生き生きとしていたことが印象的だったと感じている。

「自分の意見を言う」ことついては、「少し得意になった」、「得意になった」子どもがいた。これは、今回は全学年一緒に活動したことで、活動のねらい通り、上の学年が下の学年の面倒をみたり、下の学年は周りの子どもの言うことをよく聴いたり、それを聴いた後、自分の気持ちをしっかり話したりという場をつくることができたこと。そして、講師も自らが話すよりも、子どもたちが話すことを良く聴き、励ますことを心がけてきた結果であると考える。

〈活動中に変容した子どもの紹介〉

小学校・1年生　S・Y君

1回目の活動から参加、当初は迷路、パズルに興味をもち、漢字・読解はやりたくない、英語はゲームなら参加、気が乗らないときには部屋の端っこで「逆立ち」をするなどの活動状況であり、講師は、どのように支援すべきかを考え始めていた。一方、保護者（母親）の話では、学校からも宿題が出てるので、まなびぃの宿題は「やりやたくない」と泣きながら取り組むといった状況だったとのこと。しかし、S・Y君は、ある日を境にニコニコして漢字・読解に取り組み、宿題も自分から進んでやるようになった。そのきっかけは、「友だち」であった。当初、1年生はS・Y君しかおらず、自由に座るときは一人ぼっちであった。そこに学校のクラスメートの女子が参加し始めたところ、1人ではやる気にならなかった読解も最初の15分は1人で頑張り、後の10分は友だちと意見交換するなど、友だちと一緒に頑張る空間になった瞬間、S・Y君の様子が変わったのである。宿題も学校に行くと友だちから「私は1枚終わった」と聴くと、家に帰ってすぐに「Kちゃんは、もう1枚やったんだって、僕も頑張る」と言って自ら宿題に取り組むようになったと保護者から連絡があった。このことから、プログラムのコンテンツ・プログラムの進め方だけではなく、活動する空間自体が子どもの取組に大きく影響与えることが分かる。実はこの後さらにもう1人の1年生の男子が加わり、3人仲良く最後まで活動に参加することができるようになった。

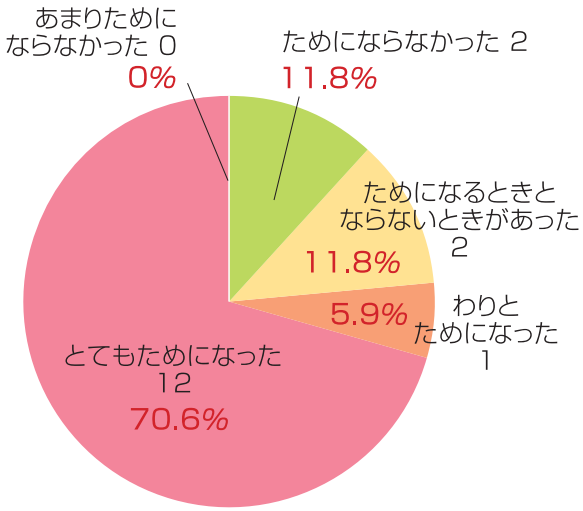
題名「　うんめい　」

生物は海から生まれてい
ろいろな形にしんかしていった。しかし、
もしも海がなかったら生物は、
生まれなかったのだろうか。または
大地から生れるかもしれない、空か
ら生れるかもしれない。でもどこか
ら生まれても同じというわけではな
い。もし海ではなく空から生れたら、
人間はいなく鳥だけ生まれて鳥の
世界になるかもしれない。生物が海
より生まれたのはうんめいである。
生物はうんめいにはさからえない。しか
しうんめいをかえることができる。これ
からはうんめいで生きるか死ぬかをえら
ぶのだ。

子ども 活動後 全員アンケート

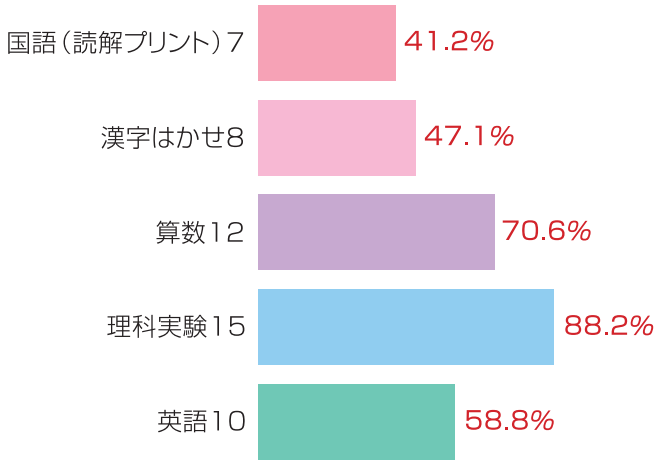
Q.今回の放課後まなびぃに参加して、
自分のためになったと思うか?

データ数：17



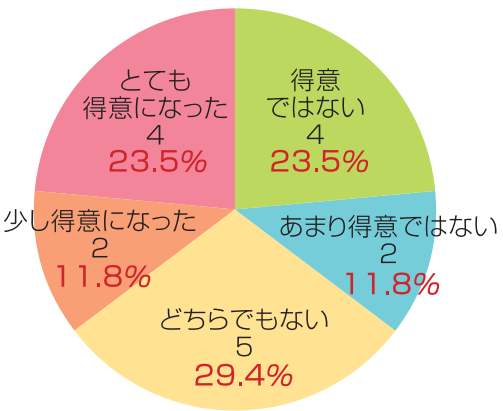
Q.今回の放課後まなびぃで
よかったと思うものはどれか?
（複数回答可）

回答者：17



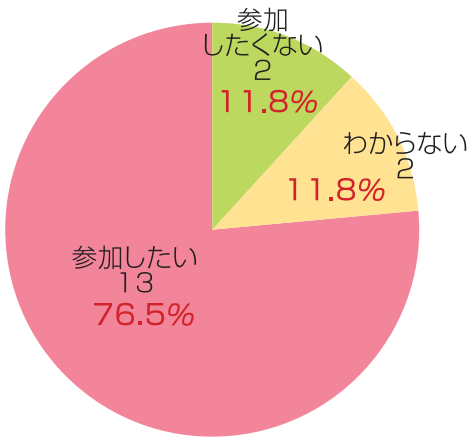
Q.今回の放課後まなびぃに参加してから、
友達やクラスメートの前で自分の意見を
言うのが得意になったか?

データ数：17



Q.今後また同じような
放課後まなびぃがあったら
参加したいか?

データ数：17



6 保護者・家庭の変容 〈保護者のアンケート結果から〉

活動後の保護者アンケートをまとめたもの（下段・保護者活動後アンケート）から、保護者が放課後活動に求める要素・形は以下の通りである。

・放課後まなびぃでよかったこと→「指導内容・プログラム」「実施会場」の意見が多い。

・子どもを参加させたいと思う放課後活動→「学習プログラム」「スポーツ少年団」が多く次に「自然体験」「趣味系プログラム」が続き、「あずかり保育」や「本の読み聞かせ」はほとんどなかった。

以上のことから、現在、保護者においても子どもの放課後は従来の留守家庭児童の保育といったニーズだけではなく、学習支援などのプラスアルファを求めていると考えられる。これまで、それぞれの町村では、これまで放課後活動に「学習プログラム」という選択肢がなかっただけで、実際に行われると、保護者はその価値に気付いたと考えられる。また、保護者からの一筆感想からは「もっと長い期間実施してほしい」「またやってほしい」等、活動を積極的に支持している言葉や子どものモチベーションについて成果を感じている保護者がいることから、保護者にとって「学習プログラム」の潜在的ニーズがあることを感じた。

今回の活動を始めるにあたって、保護者説明会では家庭に3つの協力をお願いした。

① 宿題をやったかどうかのチェック表をつける

② 低学年は宿題の丸付けも保護者が行う

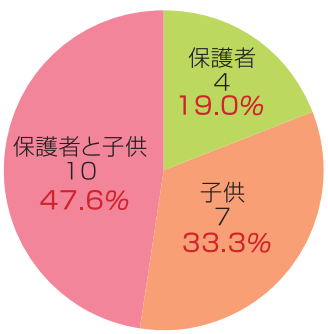
③ 今日活動で行ったことを子どもに聞いてみる

特に③については、アンケートの回答や保護者から寄せられた声などから、子どもは家庭において、保護者に聞かれなくても自分から今日の活動内容を話したり、活動内容（理科実験や漢字、数字の手品等）をもう一度やって見せたりしている。保護者にとっては子どもの前向きな姿勢を感じると同時に、子どもにとっては自分の取組を講師だけではなく、家族にも認めてもらうことで、次への活動の意欲化が図られた。活動がその場だけで終わるのではなく、活動→家庭でのやりとり→活動……と家庭での親子とのやりとりがあることで、活動へのさらなるやる気や自信がもてるとともに、親子間で気持ちの共有ができるなど、プラスのスパイラルとなっている。

保護者 活動後 全員アンケート

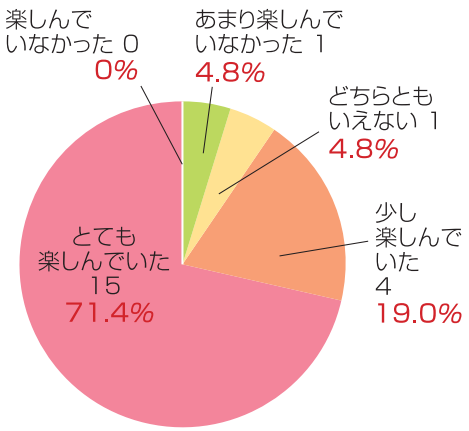
Q.今回の放課後まなびぃに参加したのは誰の考えか？

データ数：21



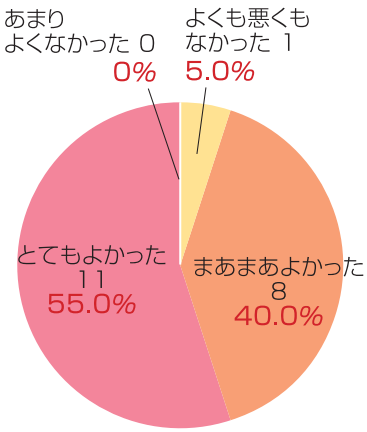
Q.お子様は今回の放課後まなびぃに楽しんで参加していたか？

データ数：21

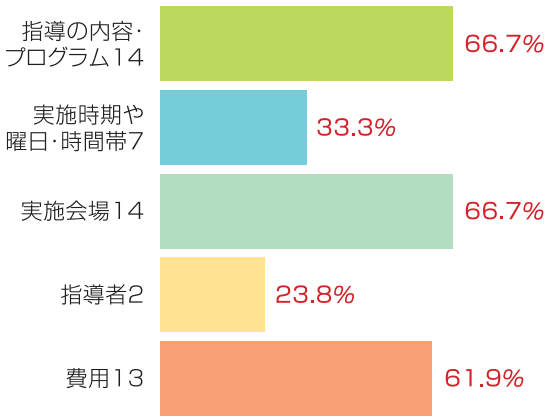


Q.今回の放課後まなびぃにお子様を参加させた感想は？

データ数：20

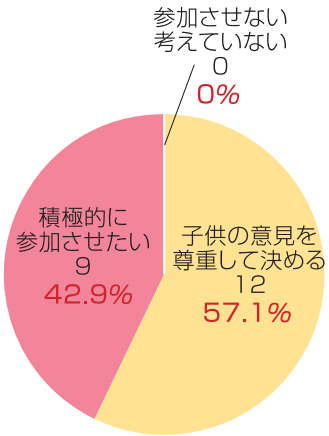


Q.今回の放課後まなびぃでよかったことは？（複数回答可）



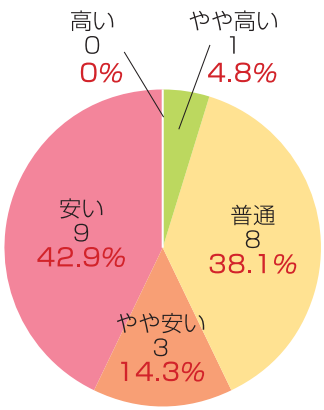
Q.今後また同様の放課後まなびぃが実施されるとしたら、お子様を参加させるか？

データ数：21



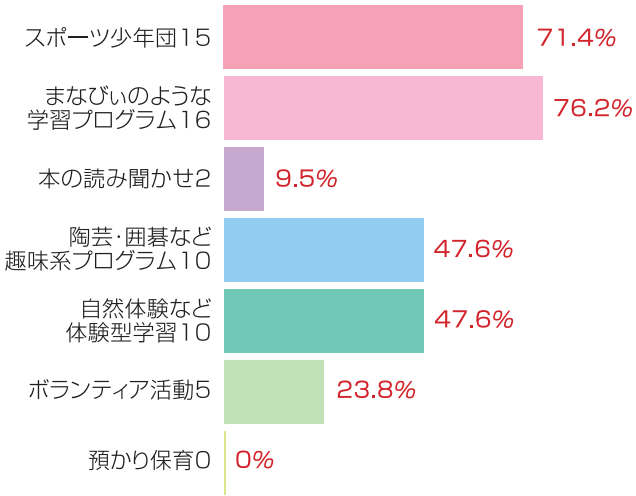
Q.参加料1回400円について

データ数：21

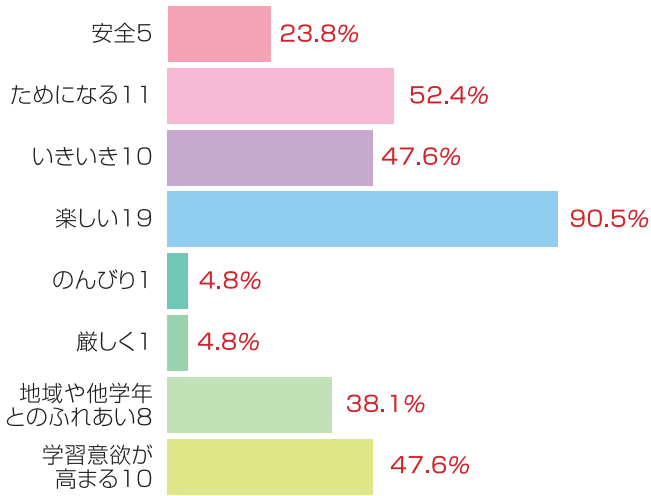


Q.お子様を参加させたいと思う放課後活動は？

（1）内容（複数回答可）



（2）イメージすること（複数回答可）



【一筆】

今回の放課後まなびぃに参加する前と後で、お子様に見られた変化

〈池田〉

●英単語を積極的に家で話していた。まなびぃで国旗をやって、それがきっかけで冬休みの自由研究でも国旗の勉強をしていた。
●「上級生の意見がすごく面白いんだよ」とよく家で話してくれた。はりきってまなびぃの宿題にも取り組んでいた。
●漢字の読みに強くなった。他学年の友達が増えた。毎週まなびぃから帰宅するとすぐにまなびぃの宿題を積極的に取り組んでいた。
●家で、まなびぃでやったことをもう一度やることがあった。宿題も自分からやっていた。
●次週までにやらなくてはならない宿題を、土日に必ず時間がかかってもやっていたのには感心した。

〈中札内〉

●学校で習ったことはあまり話さないが、まなびぃで習ったことは話してくれる。例えば、漢字の問題をなぞなぞ風に質問してきたり、数字のマジックをしてくれたり。
●最初は勉強のために行くなんて嫌がるだろうと思っていたが、案外楽しく通っていたので少しびっくりした。家庭内での勉強量ややる気については特に変化はない。
●勉強に楽しんで取り組む様子が見られたこと。
●他の学年の子供と交流が増えた。
●まなびぃから帰った後に様子を聞くと毎回「楽しかった」と笑って答えていました。

もしまた放課後まなびぃが実施されるとしたら、取り入れて欲しい科目や内容

〈池田〉

●でんじろう先生が行うような理科実験。川柳を作ってみる。自由研究や工作などのヒントになるもの。
●夏冬休みの自由研究や工作のヒントになるもの。
●今回のような内容でいいと思う。
●英語が嫌いなので、もう少し英語の時間が多ければうれしい。あと歴史物（低学年の子でも分かる範囲では難しい…?）

〈中札内〉

●もっと実験を取り入れて欲しい。
●実験・体験プログラム。理科や屋外。
●自然観察、日本独自の行事などの体験や学習（十二支の成り立ちやこどもの日の菖蒲湯にちなんで菖蒲探しなど）
●子供自身はもう少し英語をやりたいと言っていました。

7 本事業の成果と課題

本事業の成果と今後の課題について、（1）運営、（2）指導者・プログラム、（3）地域との関係の視点でまとめる。

（1）運営について

今回、児童の受け入れについて2つの問題に直面した。ひとつは普段、小学校では特別な支援を必要とする児童の受け入れ体制、もう一つは小学1年生を受け入れ始める時期である。

特別な支援を必要とする児童は、池田町で開催の放課後まなびぃに1名の参加があった。最初の体験会・説明会の時点で保護者から児童の学校での様子や学習の取組状況について伺い、こちらの体制（指導者1名と補助指導者1名で行うが、補助指導者は全体の運営のためにいるので、当該児童だけにかかわることはできない）を説明した上で、互いの状況を確認し合い参加が決まった。実際に活動が始まると、興味のないことには取り組まなかったり、落ち着きがなく暴れたりするなどの行動に対して、毎回、講師が手探りで、あの手・この手と試行錯誤を繰り返した。このような中、活動が進むにつれ、講師も当該児童の興味の方向や気持ちの動きなどが分かってきた。例えば、何か嫌なことがあれば「自分は活動に来たいんじゃない、お母さんが行けっていう」という言い訳をすること、プログラム中、自分でやりたいと思ったもの（特に迷路やパズルなど算数系）には一生懸命取り組むこと、また、「甘えたい」という気持ちから講師がそばにいると頑張る反面、逆に離れると「こっちを見てほしい」という思いから、イタズラをする等の当該児童における行動パターンの実態把握に基づく支援を行うことができた。しかし、12回目（全18回）を終えた時期に保護者から「本人は、これ以上どうしても活動に行く気にならないし、先生との約束も守れない」旨の連絡を受け、話し合った結果、途中ではあるが活動をやめることになった。これらのことから、特別な支援を必要とする児童の受け入れについては、以下のような課題がある。

- **特別な支援を必要とする児童を受け入れる場合は、個々の児童の実態に応じた支援が必要となるため、新たな人員配置が必要である。**

  ※民間主体で行う場合は人員配置は経費の面で困難な場合が多いので、保護者や祖父母等の同伴をお願いするなどの支援が必要と考える。

- **特別な支援を必要とする児童の実態把握に努め、講師間で当該児童の活動状況等についての情報を共有し、きめ細かな対応を行う必要がある。**

次に、1年生の受け入れ始める時期についてだが、今回の活動開始が9月だったので、開始時から1年生を受け入れることとしたが、慣れるまでにはある程度の時間がかかったことから、1年生スムーズに受け入れるためには以下の要素がポイントとなる。

- **1年生自身が「小学校」という新しい枠組みの中で、基本のルールや姿勢を理解し、学校生活に慣れ始めていること**
- **受け入れる側（放課後まなびぃの講師・活動に参加する2～6年生の児童）が放課後まなびぃの活動に慣れ、活動の流れ、ルール等の共通理解が図られ、皆で取り組もうとする雰囲気が創り上げられていること**

以上の2つの時期の頃合いを見て、1年生を活動に受け入れ始めるのが適当であり、一般的には4月から活動を始めるのであれば、2学期以降の受け入れが理想であると考える。

（2）指導者・プログラム

今回の活動はそのネーミングの通り、子どもに必要なものは「教育」ではなく「学習」であることという大前提となる方針がある。以下は活動を始める前に、講師が研修会で学び、保護者説明会で説明した主な内容である。

「教育」は教える・育てるという主語は「親」であり、「学習」はもちろん主語は「子ども」である。人は「教わったこと」だけでは社会で生き抜くことはできません。常にその時代の社会、自分の立場に合わせて必要なことを「学び」続けて生きていきます。だからこそ今、子どもには自ら「学ぶ」その喜びを感じ、「学ぶ」ことを肯定的にとらえ、その姿勢を身に付けてほしいのです。

このことから、今回の活動は子どもの「自発」「気づき・発見」を促すことを目的にプログラムを組んできた。しかし、この「目的に合わせてプログラムを組む」ということが一番難しいことでもあった。それを今回特に実感したものが理科実験のプログラムである。2（2）で紹介した「空気砲」は前述の通り、子どもに見せ・感じさせ、あとは自由に取り組ませるという活動を行った。一方「熱気球」ではプロセスを子どもに説明しながら作成させた。この2つの進め方の違いにより、子どもが自ら考える姿勢（「次はどうしよう」、「こうしたらもっと上手くできる」）に違いがあった。前者「空気砲」では、活発で一体感のある取り組みとなったが、後者「熱気球」においては、活動の始めは、真剣な子、あまり関心がない子など、子どもたちの活動意欲にばらつきがあり、温度差が感じられた。今回の活動方針（リンカーンメソッド）に基づき実施するのであれば、前者の見せ、感じさせ、その後は自由に活動するという進め方が重要である。その後、後者の「熱気球」活動中に方向転換をしていき、自分たちの意思で考え、どんどん自由にさせるようにしたところ、子ども達の表情も生き生きと変わり、子ども達同士が「これは切ろう」、「ここを長くしよう」等、活発に発言しながら試行錯誤を繰り返し、何度でも上手くいくまで熱気球の打ち上げにチャレンジをしていた。同じ理科実験というコンテンツでも、導入・アプローチなどのプログラム化の段階で大きな差が生じる。今回は実施しながら、一つ一つ講師自身が学ぶことができ、間違った時点で間違いの原因の理解・共有をし、修正もできた。今後も活動を進める中における

- **講師間の連携や方針の確認**
- **プログラムの共有、見直し**
- **修正のプロセス・スキームの構築**

などが課題である。

（3）地域との関係

地域との関係で重要なことは、地域全体がまず放課後活動としての学習プログラムを理解していただき、その上で地域と協力し人材（見守りボランティア・講師ボランティア）のネットワークを形成していくことである。

地域の学習プログラムの理解については、地域住民にとっては、「学習プログラム」という言葉から「学習塾」的なイメージを考える人も少なくない。しかし、まずは活動の主体である自治体がこの取組の位置付け「放課後活動としての学習プログラム」と方針（「リンカーンメソッド」を踏まえた「学ぶ姿勢」、「社会性」を身に付けることを柱にする）を明確にし、地域に示し、理解と協力、参加を促すことで、地域の中に少しずつ学習プログラムの理解が浸透されていくものと考える。大切なことは「子どもの主体性を育てる」、「地域社会が子どもを育てる」などの視点を行政、地域、保護者全体で共有していくことにある。その上で、これらの取組に賛同し参加したい人材でネットワークを形成していくべきであると考える。ネットワークの形成に必要なことは、

① **「何か協力したい」、「これならできる」という人材**

② **その人材を適格なポジションに配置したり、プログラムを運営したりするコーディネイター**

今回は①は教育支援協会北海道の人材バンクのボランティア、②は教育支援協会北海道のスタッフが務めたが、①については、ボランティアが多いほど充実した活動となるので、地域の中で1人でも多くの人材に関わっていただくことで活動が一層充実する。②は、専門的な知識や運営する力などが必要となるので、専門スタッフが適任であると考える。さらに、活動を進めていく中で、①の人材が②に携わるといった場合も考えられ、より広い視野で活動を支える人が増えることで活動はより地域に根ざしたものとなっていくものと考える。

参考事例

総合的な放課後対策推進のための調査研究に係る視察及び調査

○内　容:「おおさか・まなび舎(や)事業」の視察調査
○日　時:平成22年2月3日(水)
○視察先:大阪府吹田市立吹田第六小学校

大阪府では、平成20年度から、学習習慣の定着と学習意欲の向上を図るため、府内市町村の小・中学校区において、おおさか・まなび舎(や)事業を実施している。小学校区(政令・中核市を除く)においては、おおさか元気広場推進事業(国庫補助事業)を活用し、「まなび舎(や)Kids」を実施している。以下、吹田市における「まなび舎(や)Kids」の活動について紹介する。

事業全体像

〈おおさか・まなび舎(や)事業〉

おおさか元気広場推進事業の活用

〈吹田市(9小学校):太陽の広場拡充実施モデル事業〉

○小学校区の全児童に安心・安全で日常的・継続的な体験活動の場の提供
○地域の学校長(キャプテン)の配置と共に、地域を中心にした人材の確保や育成
○学童保育事業との連携を一層強め、全児童の「共通の居場所」を広く提供

「まなび舎(や)Kids」

●小学校施設内に放課後自習室を開設
●地域の方、大学生などの学習支援アドバイザーを配置し、宿題へのアドバイスや国語・算数の教科学習への支援
●学校課業日の平日の放課後(1回2時間程度)、年間を通じて継続的に実施

学習支援アドバイザー(学生・退職教員等)

↑ 連携 ↓

教　員

■小学校1年生～6年生
■吹田市内9小学校区(全33校区中)
■水曜日の放課後を中心に週3～5回程度
■国語・算数等の宿題や自習

→ **自学自習力・学力の向上**

吹田市立吹田第六小学校

太陽の広場専用教室(1F)

登録児童出席名簿

太陽の広場の活動の様子

子どもの出席を確認する安全管理員

個々の子どもへの学習支援（計算ドリル）を行う学習支援アドバイザー

学習支援アドバイザー募集に関するチラシ（大阪府教委）

自らの課題に取り組む子どもたち

ものづくりへの支援

学習後のスポーツ活動

太陽の広場（放課後子ども教室）について

吹田市は、以前から青少年の健全育成に力を注いできたまちで組織もしっかりしている。本事業は、市が各中学校区地域教育協議会へ事業委託をして行っている。

〈取組内容〉学習活動（宿題やワークブック）を行うほか、スポーツや遊びなども実施している。

〈対象児童〉各小学校区の児童を対象に、登録制となっており、参加率は15％程度である。

〈連　　携〉月1回、学校、太陽の広場、学童保育の三者で情報交換や協議等を行うとともに、毎月、学童保育との合同行事を実施している。（月1回:キャプテン会議、学期1回:フレンド会議（研修会）の開催）

〈評　　価〉○キャプテンの配置により、これまで以上に安心して子どもを預けることができる。
○学年、クラスの異なる子どもの遊ぶ姿が多く見られるようになった。
○登下校時の子どもたちとの挨拶等、地域とのかかわり、絆が深まっている。
●下校時の安全確保や障がいのある子どもへの支援方法等について今後も検討する必要がある。

平成21年度文部科学省委託事業
「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事務局
北海道総合的な放課後対策推進委員会
〒060-8544 北海道札幌市中央区北3条西7丁目
北海道教育庁学校教育局地域支援室内
TEL:011-204-5753　FAX:011-232-1072